

重力に負けないで

[聖書] テサロニケの信徒への手紙— 4章13~18節、5章9~11節

兄弟たち、既に眠りについた人たちについては、希望を持たないほかの人々のように嘆き悲しまないために、ぜひ次のことを知っておいてほしい。イエスが死んで復活されたこと、わたしたちは信じています。神は同じように、イエスを信じて眠りについた人たちをも、イエスと一緒に導き出してください。主の言葉に基づいて次のことを伝えます。主が来られる日まで生き残るわたしたちが、眠りについた人たちより先になることは、決してありません。すなわち、合図の号令がかかり、大天使の声が聞こえて、神のラッパが鳴り響くと、主御自身が天から降って来られます。すると、キリストに結ばれて死んだ人たちが、まず最初に復活し、それから、わたしたち生き残っている者が、空中で主と出会うために、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられます。このようにして、わたしたちはいつまでも主と共にいることとなります。ですから、今述べた言葉によって励まし合いなさい。

神は、わたしたちを怒りに定められたのではなく、わたしたちの主イエス・キリストによる救いにあずからせるように定められたのです。主は、わたしたちのために死なれましたが、それは、わたしたちが、目覚めていても眠っていても、主と共に生きようになるためです。ですから、あなたがたは、現にそうしているように、励まし合い、お互いの向上に心がけなさい。

[序] 「重力」に負けてしまう私たち

「あなた方は地上のものに心を引かれないうにいなさい」というコロサイの信徒への手紙 3章の言葉を礼拝の始めに聞きました。私たちの思いはどこかで地上のものに引っ張られてしまう事がありますね。最近私は、シモーヌ・ヴェイユという人に関心があって、(彼女はフランスの信仰者、哲学者で、34才で亡くなった人ですが)、彼女はよく「重力」と言う言葉を使うのですね。私たちが鳥のように空を飛べないのは、この体が重力に逆らえないからですよね。彼女は「人間の罪」というものを「重力」という言葉に置き換えて考えているのかなと思います。例えば、彼女は頭痛の病持ちだったのですが、発作が酷くなると他の人の同じ部分を殴ってやりたい衝動に良く駆られたものだと言っています。そして殴ることはしなかったものの、酷い言葉で他人を傷つけたことは何度もあると。彼女はそれは「重力」に屈したことだと言うのです。そして、「私は、自分自身から解き

放たれなければならない」とっています。

確かに、「重力」は様々な形で私たちを、「この地上のもの」に押しえ付けようとしているのではないのでしょうか。ヴェイユは、「不幸なことや、恐怖や、欲心や、良く思われたいという心」、そういうものも「重力」だと言います。そして、そういうものがあるということ逃げずに見つめることが出来るためには、「超自然的なパン」、「恩寵」が必要なのだ、と言います。それが、コロサイ書3章の初めでパウロが言う、「あなた方はキリストと共に復活させられたのですから上にあるものを求めなさい」という言葉なのだと思います。

[1] 目覚めていても眠っていても、主と共に生きる

今日の聖書箇所のテサロニケの信徒への手紙一の4章、5章でテーマになっていることは、私たちに、それこそ上を向かせてくれる信仰の根拠の事柄です。それは「キリストの再臨」ですね。お甦りになったイエスが、この世界の救いを完成されるため、また、私たちを迎えるためにもう一度やって来られるという主ご自身のお約束です。紀元1世紀のテサロニケの教会の人々は「もうすぐにでもキリストはおいでになる」と思っていましたから、周りの嫌がらせにも耐えていました。そして互いにこの信仰に立とう、忍耐していこうと励まし合っていたのです。

けれどもまた同時に、誘惑もあったのです。それは「この地上の生活はもういい。もうすぐイエス様来て下さる」と、現実逃避のようになってしまったのです。生活も浮ついてしまった。ですからこの手紙を書いたパウロは、それは違う、と4:11でこのように言っています。—「そして、わたしたちが命じておいたように、落ち着いた生活をし、自分の仕事に励み、自分の手で働くように努めなさい。そうすれば、外部の人々に対して品位をもって歩み、だれにも迷惑をかけないで済むでしょう。」—一落ち着いて、今の生活を責任的に生きて行きなさいということです。

当り前のことですが、クリスチャンも「この世の中」を生きているのですね。その中で落ち着いて、品位を持って歩んで行きなさいと。—けれども「この地上のことに心引かれてはなりません」とも言う訳ですね。「え、どちらなの？」と誤ってしまいます。—どちらもです。両立をさせてくれる。けれど、自分の力で頑張ってやっていくというのではなく、私たちは弱いですが、そんな私たちを支えて下さる方がいらっしゃるから、両立出来るのです。それは、他ではありません。主イエス・キリストが、私たちと同じ人間になって下さり、共に生きていて下さるからです。彼はこの地上の「重力」を、「悲しみ」を、「罪」を、文字通りご自分がその身に吹き受けて下さったお方だからです。9節からお読みします。

—「神は、わたしたちを怒りに定められたのではなく、わたしたちの主イエス・キリストによる救いにあずからせるように定められたのです。主は、わたしたちのために死なれましたが、それは、わたしたちが、目覚めていても眠っていても、主と共に生きるようになるためです。」(5: 9～10)

10 節の「主は、わたしたちのために死なれましたが、それは、わたしたちが、目覚めていても眠っていても、主と共に生きるようになるためです」は、主の再臨が私たちが生きていくうちにあろうが、死んで眠ってからであろうがどちらでもよいのだ、肝心なことは、主イエスが私たちを知り、片時も離れないのだから、この主と共に生きよう、この方を愛して生きて行こう、と言っている言葉です。

[2] 「重力」の支配から解放される時

そして、パウロが明確に告げている「キリストの再臨」、これは私たちの**究極の希望**ですね。私たちは皆、赦された者として、復活の主にまみえることが出来るということを語っています。まずは主を信じて眠りにについている者たちがよみがえり、その次に、その時生き残っている者たちが主と出会うのだ、と書いています。そして、「**空中で主と出会うために、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられます**」(4:17) とパウロは言いました。「空中携挙」という言葉もありますが、「空中で」なのです。荒唐無稽でしょうか？ いいえ、これこそ一方的な**恵み、恩寵**なのだと思います。私は思ったのですが、空中というのは、は先ほどの言葉で言えば「重力」の支配から解放されているのですね。「雲」とは、天と地の間にあるものですよね。そこに包まれる。その時私たちは、私たちが地に引きずり落とそうとするサタンの方に完全に勝利された神様の力に捕えられるのです。何と大きな慰めか！と思います。

—「このようにして、わたしたちはいつまでも主と共にいることになります。ですから、**今述べた言葉によって励まし合いなさい**」(17-18 節)。—これはテサロニケの教会だけではない、私たちの交わりに対しても言われている言葉だと思います。

[結] 「I LOVE YOU JESUS」

一つのエピソードをご紹介します。それは、作家でもあり、クリエイターでもある**いとうせいこう氏**の手記『**「国境なき医師団」を見に行く**』(講談社)を最近読んで、とても心に響いたことがありました。その本の中で、いとうさんは2016年に訪れた震災後のハイチでの印象的な出来事を書いていきます。

2010年に大震災がハイチ共和国で起こり、その災害直後から**国境なき医師団(MSF)**は現地に入って、緊急支援やコレラの治療などを行い、続けています。国の保健医療体制がまだ機能不全なので、MSFでも病院を運営していますし、更

には、性暴力の被害を受けた方々に対する医療や心のケアのためのセンターも運営されているのだそうです。そこにいとうさんは行くチャンスが与えられて（他にもギリシア、フィリピン、ウガンダに行かれた）その時の記録を本にされたのです。詳しいことは省きますが、本当に現地の過酷な状況である現実と、そこで正に命を張って働いている MSF のスタッフたちに出会って、もう帰国する日の出来事について、いとうさんはとても印象的に書かれています。

帰りの空港に向かう途中、四駆の運転手（MSF スタッフ）が現地のスラム街を通過して、写真を撮ってもいいよと言われ、いとうさんは躊躇しました。自分の幼い時の記憶もあって貧しさをカメラに収めたくはなかったのです。けれど「それではレポートのために」と機械的にスマホのシャッターを数回押しました。後でスマホを確認したところ、その中の一枚に目が引きつけられました。スラムのバラックの、間に合わせの木の扉にこのような文字が刻まれていたからです。「**I LOVE YOU JESUS**」。いとうさんはこう書いています。「あれほどの苦境の中で、と思った。そして書かれた言葉が英語であることに気づき、俺はさらなる衝撃を受けた。フランス語でも（土地の）クレオール語でもない以上、それは外側の俺たちに向けてのメッセージなのだった。「我々はイエスを愛している。哀れむなよ！」と言われていたように思った」と。

私は、いとうさんの柔らかな心にも打たれましたが、誰が書いたのかも分からないこのひと言は、正にこの現地の人の生き方そのものなのではないか、お前はどうか!?!と迫られるものを感じました。私たちが信仰を与えられたというのは、単にイエス様を信じることではなく、「**I LOVE YOU JESUS**」と言って生きることではないでしょうか。それが、地上のものに屈しない、苦しみや悲しみに押しつぶされない、「重力」に負けないことなのではないか。私はそう思いました。

私たちは、いつかは分かませんけれども、死んだ後かも分りませんけれども、神様によって引き上げられ、あの**主イエス様と親しくまみえる日**が来るのです。それが私たちを愛するが故の神様のお約束です。今日というこの日を、また新しい一週間を、「その日」を軸にしながら、上を仰ぎながら生きて行きましょう。

お祈りを致します。

神様、今日のみ言葉をありがとうございます。どうぞ、この地上にあって、上を見上げる信仰をお与え下さい。辛いこと、大変なこと、どうしたら良いか分からないことが次々に襲ってまいります。私たちの人生はイエス様が共に在る人生であることを感謝いたします！どうぞ日々、心の内に「**I LOVE YOU JESUS**」と、あなたに寄り頼んで、賛美して生きることが出来ますよう、聖霊を豊かに注いで下さい。主イエス様の御名によって祈ります。アーメン。